

[4] 虚空に残るもの ～御祝儀舞踊と道化のマイム～

1989年12月8日 東京新聞 夕刊

日本舞踊の中に「御祝儀物」といわれるものがある。祝い事とか、演奏会、舞踊会の初めや終わりに演じられる半ば儀式的、半ば余興的な踊りのことで、たいていは四季の風物をうたったり、古今の芸術作品にふれたり、あるいは多種多様な人物像を演じわけたりする。一つの役を踊るわけではなくて、途中男になったり女になったりもするから衣装は素踊り、威儀を正して色無地紋付きか裾模様、男なら袴ということになっている。

御祝儀物の代表格である清元「北州」は、江戸の北にあった遊郭、吉原の年間の風物をうたったもので、「およそ千年の鶴は……」に始まり、「霞の衣えもん坂 衣紋つくろう初買の」の言葉に合わせて遊客、幫間、松の位の太夫、突き出し女郎、禿、男衆、馬子、武士、物売りと、数え切れない人物を踊り分ける。

もう一つ、初春気分「名寄せ」は歌詞そのものが清元の名曲の名題を集めてつづった、いわば言葉の隠し絵。踊りもまた、やれ三番叟、やれ高砂、やれ助六と、まるで謎かけのようなもので、前後の脈絡はまったく無い。

●だが、芸がある

しかしこの内容空疎、装飾抜きの舞踊が、実に高度の芸を要求するのである。ストーリーがあるわけではないから、話を盛り上げようがないし、変な思入れをする余地もない。もの本によれば、「物真似に徹し」かつ「芸の年輪にものをいわせて」「格式の高い演技にまどめ上げる」とあるが、これがなまかなことではない。舞台中央に座してお辞儀からゆっくりと顔を上げ、前に置いた扇子を取って構える。と、もうそれだけで大方その一番の勝負がついてしまう。

これを鑑賞する方も、できうることなら言葉のひとつひとつが持っている文化的な背景が分かっていることが望ましい。踊りの振りにしても然りで、短い時間に形をなしては次の瞬間にはもう過ぎさる動きの、これはこの物語のここ、あれはあの芝居のかしこと、その原典が逐一分かったら、これほど盛りだくさんで、

[4] 虚空に残るもの ～御祝儀舞踊と道化のマイム～

1989年12月8日 東京新聞 夕刊

面白いものはない。そこまでは行かなくても、老練な手法や工夫の程くらいは見えてほしいものだが、それもやはり修練のうちで、ああだこうだと感想が言えるようになるには、ちよつと時間がかかる。

しかし、芸とはおそろしいもので、まったく初めての人にも、良いものと悪いものは一目瞭然、区別がついてしまうものなのだ。食べ物と同じで理屈抜き。一口たべて美味しいものは美味しい。

そんなわけで、生まれて初めて日本舞踊を見たという人が訳もわからずに心底感動したのが名手の踊る御祝儀物だったというのは、珍しいことでもなんでもない、よくある話である。本当に良い御祝儀物を見てみると、文化的な知識や物語的感動をこえて、あるいはまた個性だとか感情表現だとかいった次元をこえて、「人格」から生身の「人」が消えたそのあとの虚空に、一種言いがたい精神の「格」だけが柔らかに立ちのぼるのを見るような、そんな思いにさせられる。

●そして西洋には

はたして西洋にこんな舞踊があっただろうか、とつらつら考えていて、ふと思いついたのがパントマイムである。道化のなりをして物真似をするのだが、その動きの舞踊的で鍛錬されていることといたら、なまじの創作舞踊の比ではない。とは言え、フランスにいたる時にも、大通りの端とか、メトロの構内の片隅で実演しているのをよくみかけたから、文字どおり大道芸か寄席芸で、そんなに格の高いものではないのだろう。

そのパントマイムで、私が今までで一番感動したのは実に「不祝儀物」だった。といっても、何もお葬式で余興をやったわけではない。ネタがお葬式だったのである。

見たところ男か女かわからないノッポとズングリの二人組が、黒づくめの服装で次から次と様々な人物を演じた。ノッポの女が夫を亡くして、ズングリの子供と二人で悲嘆にくれている。未亡人を背の低い太った神父が慰める。子供を、親戚のやせた叔母さんが哀れ

[4] 虚空に残るもの ～御祝儀舞踊と道化のマイム～

1989年12月8日 東京新聞 夕刊

がり、励ます。いろいろな人が会葬に来て、それぞれに親切そうな振りをし、しかし結局は自分のことしか考えないエゴを覗かせて、そそくさと立ち去っていく。しばらく後、二人きりで寂しく墓参りをする親子の姿。やがて時がたち、二人は明るさを取り戻す。母は喪のベールをぬいで、花の帽子をかぶり、いそいそと新しい恋人に逢いに行く…。

●笑ったそのあとで

伴奏など何もない無音の芸だった。しかし実に快いリズムカルな動きが、今でも目に焼き付いている。人物のひとりひとりの振りが何とも言えず滑稽で、鋭く真実を突いていて、終始膝をたたいて笑ってしまうのだが、それでいて、気がつくど何時のまにか深い空しさに包まれているのであった。

パントマイムはこの世の虚飾を剥ぐ芸、権威をひきずりおろす芸だ。それというのも、演じる側が道化、つまり愚か者を装っているからである。何の術いもなく、カミもない無心の目で見られるとき、現世の価値が内部の空洞をあらわにしてしまう。

おそらくその空虚は、日本舞踊の御祝儀物が目指しているものと、本質において通じているのかもしれない。しかし、それぞれの文化の総体のなかでの位置付けはまったく違う。日本の文化は「空」や「無」を重んじて、饒舌より寡黙、思考（パンセ）よりはむしろ無念無想を貴しとする。西洋の文化の秩序とは逆なようだが、さりとて西洋も「空」や「無」の意味をまったく無視しているわけでもない。宮廷の場面に道化はつきものだし、トラップでも、ジョーカーは一種にしてゲームを逆転させることがある。

してみると…、私は考えてしまうのである。日本で一番偉ぶっている人が、時にひどく内容空虚なことを言ったり、物笑いの種になったりするというのは、あれは深いところでちゃんと日本の文化の原理原則に適っていることなのだろうか。

[4] 虚空に残るもの
～御祝儀舞踊と道化のマイム～

1989年12月8日 東京新聞 夕刊